

1. 略歴

1980.04	東京大学教養学部理科 I 類、入学
1982.04	同学部教養学科第一文化人類学学科、進学
1984.03	同学科、卒業
1984.04	東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学
1986.03	同修士課程、修了
1986.04	同研究科文化人類学専攻博士課程、進学
1988.04	社会学研究科より総合文化研究科へ移管
1990.08	東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
1995.11	東京大学大学院総合文化研究科、博士号（学術）取得
1994.04 - 1997.03	東京大学教養学部専任講師
1996.04	大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
1997.04 - 2004.09	東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授
2004.10 -	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
2005.04 - 2009.03	国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員
2009.04 -	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授
2014.09 -	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻教授

2. 主な研究活動

多様な状況における文書・読み書き、その人間・社会との関係の研究

a 専門分野 b 研究課題

文化資源学（文書文化論）

主に発展途上国を念頭に置きつつ、広く文書・読み書きと人間・社会の関係について研究している。また、調査研究方法の検討、改善にも強い関心を持っている。様々なフィールド調査で得られるデータや知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的人工物 (cognitive artifacts) の変化に関する歴史学的研究と有機的に接合することを目指して、隣接諸分野の研究者との共同研究にも積極的に取り組んでいる。

c 概要と自己評価

2014～2015 年度に引き続き、以下の 3 つの課題を意識しつつ、相互に関連しあう複数の研究を並行して進めた。

- ・文化資源学としての文書文化の考察
- ・デジタル技術と文書文化の関係の考察
- ・文書・読み書きに関する多様な領域の専門家との共同作業の推進

(1) 文化資源学の展開をデジタル技術を援用しながら分析する試み「文化資源学の射程」プロジェクトの研究結果をまとめた共著論文が『Journal of the Japanese Association for Digital Humanities』2(1)で公表された（査読付き）。

(2) 分科会幹事を務めてきた文化資源学会「文化資源学の展望プロジェクト：文化資源学を支えるテクノロジー」の研究成果を『文化資源学』14号の特集として監修し、その一部として「神田祭附け祭り・つくりものプロジェクト報告」を寄稿した（査読なし）。さらに、これらの研究活動を踏まえて、『文化資源学』15号の特集「文化資源学と私」に「文化資源学の近未来」を寄稿した（依頼論文）。

(3) 東京文化資源会議（伊藤滋会長、吉見俊哉幹事長）の幹事に就任し、分科会「地図ファブ」のメンバーとして神田地域の歴史と食文化に関するデータベースを構築し、それらのデータをインタラクティブに見ることのできるアプリケーション「神田祭ぶらり」の開発に参加し、公開シンポジウムを行った。また、データベース・アプリの開発過程を分析した研究報告を「第45回可視化情報シンポジウム」で行った。

(4) 2014.4 より国際協力機構（JICA）中米・カリブ地域生活改善広域アドバイザーとして現地調査、協力を行ってきたコスタリカ共和国における生活改善プロジェクト情報システム構築に関する共著論文が「JICA Institute Working Paper No.146」として公開され（査読付き）、『可視化情報シンポジウム 2016 OS7: ビッグデータと知識の可視化』において生活改善アプローチ可視化システムに関する研究発表を行った。また、『電子情報通信学会誌』より依頼を受け、「途上国における ICT とリテラシー」を寄稿した（依頼論文）。

(5) 共同研究者として参加した国立民族学博物館・共同研究プロジェクト「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」(2013.10-2017.3、代表：吉江貴文)の一環として「研究者の集合知の可視化を試み、成果を「スペイン植民地帝国 文書ネットワーク」として公開した。<http://bunteku.sakura.ne.jp/hisGisMinpaku/>。

以上のように、歴史学、情報学、国際協力、地域開発など多様な分野の専門家との共同作業を積極的にを行い、成果を発信してきた。この二年間は、研究発表、論文投稿に加えて、データベース構築、アプリ開発など、ICTを活用した発信の選択肢が増えたこと、また、論文執筆においても、紙ベースからウェブ上へと主たるメディアがかわった移行しつつあることが印象的である。また、東京文化資源会議での活動を通してこれまでに以上に地域の行政、市民、企業と連携する機会が増えたことも大きな変化である。今後も、引き続き、学際性、社会連携、情報技術の積極的活用を重視した文化資源の分析を進めていく。

d 主要業績

(1) 論文

中村雄祐、「平成27年神田祭附け祭り・つくりものプロジェクト報告：2013~2015年」、『文化資源学』、14、113-124頁、2016.6

中村雄祐・鈴木親彦、「特集「文化資源学を支えるテクノロジー」はじめに」、『文化資源学』、14、65-66頁、2016.6
Tomomi Kozaki, Yusuke Nakamura、「The Evolving Life Improvement Approach: From Home Taylorism to JICA Tsukuba, and Beyond」、『JICA Research Institute Working Papers』、No.146、2017.3

Yusuke Nakamura, Chikahiko Suzuki, Katsuya Masuda, Hideki Mima、「Designing Research for Monitoring Humanities-based Interdisciplinary Studies: A Case of Cultural Resources Studies (Bunkashigengaku 文化資源学) in Japan」、『Journal of the Japanese Association for Digital Humanities』、2(1)、2017.9

中村雄祐、「途上国におけるICTとリテラシー」、『電子情報通信学会誌』、Vol. 100, No. 11、2017.11

(2) 学会発表

国内会議、中村雄祐、「コスタリカにおける生活改善アプローチ検証プロジェクト 可視化システムの展開」、可視化情報シンポジウム2016 OS7: ビッグデータと知識の可視化、工学院大学、2016.7.19

国内、中村雄祐、鈴木親彦、真鍋陸太郎、「祭礼における文化資源の活用 —「神田祭ぶらり」の開発を軸に—」、第45回可視化情報シンポジウム、工学院大学(新宿キャンパス)、2017.7.19

(3) 予稿・会議録

国内会議、中村雄祐、「コスタリカにおける生活改善アプローチ検証プロジェクト 可視化システムの展開」、可視化情報シンポジウム2016 OS7: ビッグデータと知識の可視化、工学院大学、2016.7.19

『可視化情報シンポジウム2016 講演論文集』、2016.7

国内、中村雄祐、鈴木親彦、真鍋陸太郎、「祭礼における文化資源の活用 —「神田祭ぶらり」の開発を軸に—」、第45回可視化情報シンポジウム、工学院大学(新宿キャンパス)、2017.7.19

『可視化情報シンポジウム2017 講演論文集』、2017.7

(4) マスコミ

「神田祭ラボお披露目会」、2017.4.22

「2年に一度、神田祭で体験する歴史と今@神田明神」、『T-Cha (東京文化資源会議ニューズレター) vol.1』、2017.9.30

(5) データベース

真鍋陸太郎、中村雄祐、鈴木親彦、岸川雅範、「神田祭ぶらり」、2017.4

中村雄祐、「スペイン植民地帝国 文書ネットワーク」、2018.2

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、文化資源学会、理事、2014.7~

国際、Japanese Association of Digital Humanities、学術雑誌編集委員、2014.10~

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

独立行政法人、国際協力機構、中米・カリブ地域生活改善広域アドバイザー、2014.4~

任意団体、東京文化資源会議、幹事、2017~